

2. 学生の学びとその軌跡

1) 在学2年間と卒業後5年間の個人の成長記録から

會澤俊三（南山短期大学助教授）

一人の人間が歩んだ人生を描き出すのは難しい。特に内面的にはげしい変化と成長をきたす大学時代－就職－結婚－退職という波乱に満ちた7年間に限って、人間関係科2年間で学習がどのように影響しているかをなぞるのは至難の業である。しかし、人間関係科の体験学習教育が唯に在学2年間の過程をもって善しとするのではなく、卒業後の変革をも本来的に志向しているものであれば、その後の形成史に多大の関心を持たずには居られないのである。本稿では、5期生の一人に焦点をしばり、彼女に関する膨大な資料を何ら分析することなく、それらの中から一貫して見られる7年間の成長の過程とその要因とを、彼女自身の生の言葉で記した文章の幾つかを紹介することにより、読者自身にそれらの行間から体験学習教育の効果を読み取ってもらうことにとどめたい。

私の形成史 part I：南山短期大学人間関係科での2年間

私と人間関係科 私は何の予備知識もなく、軽い気持でこの人間関係科を受験した。大きなキャンパスに憧がれ、何かを求めていた私にとって、南山短期大学は第一志望ではなかったからだ。それで入学頭初の私は、全然知らない、一見変わった人間関係科の授業に、何が起るかわからないという好奇心だけに支えられて参加していた。

まず一番初めに考えさせられたのは、「私が大学生活に一体何を求めてきたか」ということだった。確かに、何かを求めて受験勉強に励んできたはずなのに、漠然としていてははっきりしない。オリエンテーション・ウィークに始まる人間関係科の授業は、私に、いつのまにか、「自分を見つめる」という課題を与えていた。教授はスタッフであり、教える立場ではない。人間関係科での授業は、学生が自主的に学びとる場…私が、自分を見つめるという課題を見つけたのも、誰かに言われたからではなかった。ただ人間関係科での授業は、考える材料と、時間と場所と、きっかけを与えてくれるにすぎない。



私は高校まで自分に確固たる自信を持って生きてきた。負けず嫌いで、人より優れていたいと、何事にも努力してきた。だが、そうした生き方の中で、私がどれだけ深く人と関わってきたかをふりかえる時、あまりにも一人よがり、周囲に甘えてきたことを自覚し、後悔し、自分に対する自信が全く消えた。絶望し、自己嫌悪し、開き直ってつぶやいてみたりした。年に数回ある合宿は、そうした自分の中に起こる変化の節目だった。

人間関係科を楽に通り過ぎようとするれば、いくらでも出来る。自主的に学びとるのを止めればよいのだから。だが、自ら苦しみを覚悟で自分の生き方を考えてみることは、自分を創り、悩むことは、自分が真剣に生きていることの証だと思う。

私は人間関係科でやってきたことを、一生続けていきたいと思っている。「いかに生きるか」を追求し、実践してゆくために。

「ひかる子」 私は、これまで「光子」という名にちなんだニックネームが多く、「みっちゃん」「ミツコ」「みつこさん」と言ったありふれたものが多かった。ところが、南山短期大学に入って私の周りには、「光代」「美千代」「みち代」「みちえ」など、いわゆる「みっちゃん」が多かった。そこで、服部啓美が、「ありふれた呼び名ではおもしろくない、ヒカルコにしなよ」とつけてくれたのが、このニックネームの由来である。とにかく、こんなけったいな名前と呼ばれたのは初めてで、なんだか、自分でないみたいな気がしてならなかったのだが、割とハイカラで、新鮮な感じがして気に入った。もちろん「水谷さん」と呼ばれるよりは、ずっと気分が良いものだし、気軽に呼びつけてくれるので、本当にすぐに溶け込めた。それに私の名は、本来両親が、いろいろな人々の中で光り、秀でるようにつけてくれた名であり、私自身も、気に入っていた名であったこと。「ミツコ」と読ませるよりも、「ヒカルコ」の方がより意味をあらわしてくれそうで、本当に良いネームだと思ったものだ。

卒業研究グループで、一人一人をイメージで花にたとえてみた。すると皆一様に、私を「ひまわり」だと言った。私自身、小学生の頃から、「好きな花は？」と尋ねられると「ひまわり」と答えていたくらいだから、大好きな花であることに間違いはない。太陽にむかって、まっすぐに伸びて、大輪の花をつけるたくましい花でありたいと、常々思い、憧れていた。「ヒカルコ」のイメージは、そうした夏の花「ひまわり」に重なるのかもしれない。だが、ひまわりの花は他の花よりもずーと高く、しかも一日中太陽を見つめているから、他の花たちのことを何も気付かずに、ひとりだけ、誰にも頼らずに居るようで、今の私には、それほど魅力ではなくなっている。「ひかる子」でありたいとあって思った頃は、自分ひとりでつぶしるワンマンな部分が多かった。そうした願望が強かった。だが今は多ぜいの仲間の中で、助けられ、励まされながらも、私らしい輝きをもって、キラリとひかる子でありたいと思う。昔のように、独善的ではありたくない。

今、仲間内では、「ひかる子」という呼び名がすっかり角をとり溶け込んでい
る。そして溶け込みつつも、やっぱり、私らしさをもっている。こうした輝きを
大事にしていきたいと思っている。いつまでも、真の「ひかる子」でありたい。

私の作った人間ソング

『今ここで』

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. 長い道を 歩いて来た | 2. 遠い道を ひとりで来た |
| ふり向くことさえ 忘れていた | 信じあえる 人もなくて |
| 夢に破れ 疲れた時 | 寒い心 閉じたままで |
| 一人の部屋で 泣きあかした | 分からあう喜びも 知らなかった |
| それでも 私は 今 気づいた | それでも 私は 今 気づいた |
| この苦しみ 忘れないで | 人との出会い 大切に |
| 自分を見つめて 生きてゆこうと | 友情かみしめ 生きてゆこうと |
| それが私にできる すべてだから | それが私にできる すべてだから |
| 今ここで | 今ここで |

私が人間ソングを作詞したいと思ったのは、入学してすぐに創設した南山コン
コルディア部の夏の台宿の時であった。先生から、2年生がワークショップ台宿
で作ったという「グリーン・キャンパス」と「隼人町19番地」の曲を紹介され、
部員で歌い録音した時、こういう感じの曲は、皆で歌うには楽しいが、人間関係
科に代々伝えてゆくには、もっと心に残るものが欲しいと思った。それから機会
がなくて、なかなか作るまでに踏み切れなかったのだが、卒業台宿で雰囲気盛り
あげ委員会に入る時、「人間ソングを作ろう」と決意した。

この詞は、私の2年間の人間関係科での「気づき」を詩にしたものであり、1
コーラス目は、「自分自身への気づき」がテーマとなっている。今まで自分が歩
いてきた人生、人間関係科に入るまでの18年間は、私にとっては、あまりにも
長い道だった。自分自身を正確に、客観的に、また厳しく見つめることに気づか
ず、そうすることからうまく逃がれてきた長い年月だった。だが、1年の『人間
関係基礎論Ⅱ（心理学的基礎・同演習）』で、「私の形成史」を書くことにより、
少しずつ、今までの自分を振り返ることを覚えた。知らずに見過ごしてきた過去を
発見する度に、「あの日あの時、もっと目を見開いて、自分を、他人を見つめれ
ば良かった」と、過ぎ去った日々の長さを思い知らされた。毎授業のふりかえり
の習慣は、私にとって、知らず知らずのうちに、自分を見つめることを身に付け
させていたように思う。だが、自分を振り返り、その無力で、無知で、何だか無
駄に過ごしてきた自分を認めた時の苦しみは、とても簡単に、癒せるものではな
かった。「時は二度と戻らない。」わかり切っている現実の前に幾度悔やみ、く
やしい思いをしたことか。その最大の時が、『Tグループ台宿』だった。「夢に
破れた時、一人の部屋で泣きあかした」これは、Tセッションを終えた後、自分

をふりかえった時のショックそのものである。そして三月、四月と、苦しみ、自己喪失におびえながらも、「自分は他の誰でもない自分なんだ」と言いかせて、その苦しみを忘れるのではなく、すべて引き受け、消化しようと努めた。そうした過程が詞に込められているのである。

2コーラス目は、「他人からの働きかけへの気づき」である。人間関係科の中にはインフォーマルグループが存在し、その絆は強い。だがT台宿以来、その絆に対する疑問がわき、何度も疑問をぶっつけ合って来た。これまで、そうした疑問にも気づくことなく、自分勝手に生きていた自分が、あの台宿の夜、緊迫した空気の中で、仲間の中で生きていることを知った驚きと喜びと怖さは大きかった。私は、これまで沢山の人々と出逢い関わってきた。だが、互いに働きかけることを忘れ、避けて通ったために、すれ違ってしまった人々は数知れない。「友情」という言葉に、それほど温かさを感じなかった私が、各論『創造性』の台宿の時、何かずっと重い意味をこの言葉の中に発見したような気がする。人間関係科ではじめて、こういう気持ちになれたのは、おそらく、人と自分が互に向き合い、求め合ったからだろう。

私にとって、この『今ここで』は、こうした意味を内包している。だが、他の人間関係科生の中にも、それぞれ、さまざまな人関生活が、含まれているだろう。そうしたものをも、意識しつつ、私の作った詞の中に、それぞれの気持ちをも重ねてもらえればいいと思う。

人間関係科は、英語科との交流もだが、人関生同志なのに、1年と2年の交流があまりにも少なすぎる。それぞれのコミュニティとしてまとまっているのはよいが、その間を流れる、人間関係科の魂、心といったものが、伝えられないものかと思う。スタッフだけが媒介でなく、2年から1年に直接伝えてゆける、「人関の心」が欲しい。そういう気持ちを込めて、私はこの人間関係科のテーマ『今ここで』を作詩した。

私と南山コンコルディア 私にとって歌うことは、昔からの夢であり憧れであり、趣味であり、特技であった。幼い頃から、母と童謡をうたい、TVの歌手顔負けで歌い、そして小学校以来ずっと、声楽を勧められるくらいに、声は天性のものを持っていた。だが、そうした声に恵まれること以前に、とにかく私は歌うことが好きだ。

声を張り上げ歌っている時だけは、自己陶醉できる、嫌なことも忘れて、ただ浸ってられる、その歌の世界の中に…。私はそうした、歌をうたい、楽しむ場が持ちたかった。大学生になったら、そういう場を持ちたいと思っていた。ところが、南山短期大学にはそんなクラブがなかった。そこで南山コンコルディアが、そうした仲間の手で結成された。私は、けして楽器演奏もうまくないし、声楽も本格的ではないので、フォークソング系のボーカル志望でいたのが、いつの間にか部長という大役を引き受けていた。荷が重かった。結成当時の所属メンバーは





ざっと60名。そのすべての活動の中核の長となったのだから、部長という名の栄光にしがみついてもばかりいても仕方がない。私なりに、働きかけてみたつもりだ。だが、60名のメンバー、しかも気軽に入って来た人々を練習日で束縛することが出来ない。厳しい統制をとることは、人関が自主的に学ぶ場であるのと同様に、ためらわれ、はばかりられた。その心の奥には、名ばかりの部員で活動には一切参加せず、退部届けもない何十名に対する諦めがあった。厳しい統制を固めても、その何十人を動かす力、音楽活動の魅力を示す力がとうてい私にはないと思われたからである。この時の私は、コンコルディアを一人占めしていたようだ。部長の責任から、コンコルディアは私が守らねば、と、他の人の協力を信頼できなかった。部活には、時々出る、また、他クラブの関係で練習できないなど、コンコルディア部員であってその実そうでない人々を、どうしても信頼できなかった。そういう中途半端な人々が何故そういう態度をとったのか気がつかなかったのだ。要するにコンコルディアの活動自体に魅力がなかったのだ。歌が好きで同じクラブの一員になったのに、歌うことを完全に忘れてしまっていたのだ。地味でも、もっと基本的な練習を積むべきだったと思う。

とにかく私は、クラブに嫌気がさしていた。何とか形だけはクラブの対面を保った南短祭を終えて、クラブ内の人間関係がどうもうまくいかないのを感じて、次々と辞めてゆく仲間を引き止められない自分が情けなくて、コンコルディアを解散しようかとさえ考えた。その時、ずっと陰で私を支えていてくれた、服部啓美や河台順子や阿部美千子達が、この時はじめて私を叱った。「皆歌が好きで集まったクラブなのに、部長のひかる子が、そんな大変なことを口にしてはいけない」と。この時はじめて、私は、私ひとりでコンコルディアを背負った気でいたことを思い知らされ、友達の、仲間の有難さを身にしみた。小数でもいい、続けて行きたいと思った。何よりも歌うことから離れたくない私だからこそ。今思えば、我儘だったのだろう。私は、歌を気楽に歌いたかった。ところが歌うことよりも、クラブの運営上の難題に、落着いて歌うことなど出来なかった。プライベートな用も、部長であることからクラブ優先にしなければならぬ、『不公平だ』という『私だって、早く帰りたい』という不満ばかり抱いていたのが、皆を引っ張って行くことが出来なかった最大の理由だろう。いつだったか、順ちゃんが、「自分の生活を犠牲にしても、クラブを大事にすれば、人はついてくるものだよ」と高校時代の経験を話してくれた。それが今も胸の中にずっとこたえている。2年になって、とにかく1年間もちこたえたという自信と、気心の知れた人関2年の5人だけがクラブに残ったことで、割合スムーズに新入生勧誘ができた。ただ、入部直後の退部者続出もやむを得なかったが、できるだけ早く新入生同志のコミュニケーションをはかり結束を固めることを目指した。後は、1年生中心で動き出すことを待った。幸い、1年生は、活動的で、信頼できる者ばかりだったので、私たちは、半ば1年生にコンコルディアを一任する形になった。就職だ何だと忙しそうに、結局、逃げていた部分が強い。

私は、本来歌うことが好きで、南短祭にも出演はしたが、何だか、ゲストみたいな感じで、いつの間にか出来上がってしまった1年生の団結力の中に入り込むことはできなかった。その時、一抹の寂しさを覚えたことは禁じ得なかった。だが、全く無の状態から、彼女らがすべて企画し、実行した南短祭に、当日だけ参加した私の入り込む余地のないことは、必至であった。すべてが1年生の手に渡っている今、いったい私はコンコルディアで何をしたのかと思う。とにかく創設したことは、大きなことだが、実質の伴わない活動しか、出来なかったのでは、クラブを忘れ、歌うことを忘れ、自分の中で愚かにもがいていただけではないかと思う。

いずれにしても、私の人関生活の中でクラブの占める割合は大きい。人関の授業ではメンバーの皆が動くから、中心になっても問題はないし、『卒業研究』や『人間関係基礎論Ⅰ（哲学的基礎・同演習）』でも、リーダーシップを各々がとり、充実したプロセスをたどった。ところが、英語科も、人間関係科も混じった上、授業という規制もないクラブが、真に全員の力で動くことはむずかしい。

メンバー間の信頼が第一の原動力、歌うことへの熱意が第二の原動力だと思った。今後、社会に出て、仕事をする上でも、とにかくメンバー間の信頼関係を大切にすべきだと思う。これは、私が部長をやらなければ、一生気づくことのできなかった真理かも知れない。せめてそうであれば、と願ってやまない。

EPPS 性格検査での1年次と2年次の比較		〔1年次・2年次〕	
<p>1年次の結果を見ると、全体的に極端にかたよっているのがめだつ。つまり、強いものは90以上を占め、低いものは10以下というように、極端であった。中でもめだつのが、「変化」の94、「異性愛」の97、「攻撃」の93、「支配」の90、また低いものは「追従」の4、「他者認知」「養護」の7、である。全体的に見ると、異性に未知の関心をひどく示していた。また、人に黙ってついてゆくより、積極的に支配・攻撃してゆくワンマン型で、その上他者認知が低いことから、それこそ他者のことはまるで無頓着に自分のやりたいようにやってきた人間だった。自分のことは自分でするかわりに、他人のことにはかまわないところがあったのだと思う。</p> <p>2年の結果として、著しい変化を見せたのは、「秩序」が急増したことである。これは、昔からものを整理したり計画をたてることに関しては、きちんとしなければ気の済まないところがあったので、必ずしも変化したと思えないのだが、南山短期大学に入って、何かと毎日の授業や予定で計画・整理の必要が多くなったため、その現象が表面に出たためではないかと思う。全体的に見て大きな変化は、グループ活動をするようになっ</p>	達成	85	50
	追従	4	27
	秩序	10	80
	顕示	75	81
	自律	60	30
	親和	11	22
	他者認知	7	35
	求護	53	70
	支配	90	82
	内罰	67	27
	養護	7	0
	変化	94	83
	持久	14	62
異性愛	97	65	
攻撃	93	85	

て、今までワンマンで一人でしなければ気の済まなかったところが、皆で協力する作業のせいで思い通りにいけなくなり、自分だけのことを考えていては身動きがとれなくて、他人に関心が移り、「他者認知」のアップ、他者を知らないよりは自分は自分・他人は他人であったものが、他人の良さ他人の影響を知って以来、「自律」の減少につながった。しかも、他人との関わりによって、人とのつながりの暖かさ・喜び・幸せ・苦しみ・むずかしさを肌で感じることで、生まれてはじめてできて、同性に対する期待・同性同志の友情の良さをわかったからだと思う。高校までの19年間ほとんど私には人格的な関わりをもった友達はなかった。そのため、そうした暖かさ、人間的な愛情を「異性」という未知の部分に求めていたのかもしれない。だが反対に悪いことには、今まで頼るものは一人であった厳しさ、責任が減少して、連帯的な責任となり、「内罰」の低下、「求護」の上昇が見られる。要するに、頼る仲間があるための“楽”を求める甘えである。

「攻撃」「支配」は低下したとはいえ、基本的な人間性にはあまり「変化」はみられない。ただ少しだけでも変化をとげたというのは、他人と深い関わりを持つことが出来たせいだと思う。これは私にとっては1年間の大きな収穫ではなからうか。今後は、他人を気にするだけでなく、他人と深い関わりをもっていながら、自分を伸び伸びと無理なく生かすこと、もっと他人のことを考えるようになりたいと思う。

学んだこと、気づいたこと、不審に思ったこと

[これまで]

私個人に関するもの：

- *人ほどに感受性が弱いと気付いた
- *人のもっているものが欲しくなる
- *可能な限り努力し多くを吸収したい
- *“私は私なのだ”と胸を張っていら

れるようになりたい

他者に関するもの：

- *他人と話すことを好みすぐ信用する
- *他人は第一印象では決められない
- *他人は自分以下・以上という区別の
- つけ方をしていたが、十人十色様々
- なすぐれた面をもっているの気付き

環境に関するもの

- *路端に咲く花、集る昆虫たちの世界
- にもドラマがあることの発見
- *自然は生きているんだ皆
- *緑の中にいるとゆったりした気分

[これからの発展]

自分と他人を正しく認知すべきだ

それらを認知の段階で、冷静に把握し、

良いところ悪いところを私情を混じえず

判断すべきだ

良いところを吸収し悪いところを自分

りに変えてゆくのだ

他人と接する時の暖かさは決して忘れ

るべきではない

自分の基準で判断してはならない。人に

は人の物差しがあることを忘れるな

自分の周囲にも多くの人、そしてものがあることを忘れないことだ

包まれているだけでなく、自分から周囲

のものにも働きかけるのだという自覚を

静かな感じに、率直になれる

我々のグループに関するもの

*グループはメンバーのほんの些細な言動に全体が左右されるように動く
*だが反対に一人の大切にすべき心を踏みつぶして進んでゆく

人間社会に関するもの

*マスコミの構造は複雑だがそれが幾百幾千の歯車となってかみあい、人間社会を構成している。
*地域社会でも人間社会の縮図となっていると思ったのだが、農村の人々は都市の人間よりあったかい。人間の一番大事にしたい根本的な愛の心をもっているのか？

究極的存在に関するもの

*苦悩の時に神の存在を認めた上に立って考えると自分に都合がいい
*生きていると考えると不安だが、生かされていると考えると目かくしで歩いても何か大いなるものに包まれているという安心感がある

もつべきだ

集団であるグループは、グループとしてのカラーをもつ。だがグループの中では、個々の個性を失わず自分の意思をうまく反映させ、自分もグループの一員であり、グループを左右させうる影響力をもつことを自覚すべきだ

人間は一人一人だが、それぞれの個性と役割をうまく組み合わせることで社会が成っている。その組織に無理があると、組織の骨組が個性の崩壊となる。そのバランスをうまくとるべきだ

一人で生きる厳しいいばらの道。神の愛に包まれた道。生きていくのは結局自分自身であることを自覚すべきだ



グループについての所感

良いグループとは、皆が自分はグループの一員であるという自覚をもつこと、そして、自分の個性に合った役割を自然な形でとることである。この役割はあくまでも仕事上の能率を上げるためであり、意見を出し合ったり思ったことがあるときはすべてが人格的なぶつかり合いのできるような個人をもっていることである。Tグループ体験の中で、私は最後まで激することなく醒めていたのだが、この良いグループ体験をしたという点では、非常に大きな意味のあったことである。あの体験の際、はじめは目的の設定されていない状態で、まず何かをしたいというそれぞれの欲望が出てきて、皆一様に自分の欲求について話し合った。これが目的の設定の明確化・共有化への第一歩だったのかもしれない。役割分化というとすぐに“私書く人、僕しゃべる人”的に進行の便宜上のものを想像してしまい、司会などを置くとその人にすべてを一任してしまう傾向が強い。Tの際も司会や書記を置くか否かで大いぶもめたが、自然にそれぞれがリーダーシップをとって

進行していったのが今になってわかる。一人が専制的にリーダーとなろうとすると、それに相反するリーダーシップをとる者があらわれ、それぞれが主役となる。

グループでの学習は、往々にして他人任せになりがちであり、連帯責任は私ひとりぐらいここでぬけても…という方向に向えば失敗である。だが一人一人が主役となり、メンバーシップをとりながら進んでゆけば、結果として高い凝集性と高い生産性を持つ。

一人一人がその喜びを知っていれば、他人任せということは無くなるだろうが、人間関係科の宿宿は、そうした場を半ば強制的につくる意味で私たちをグループにむかわせる。しかし、根本的な本人の意志まで強制することはできないのだから、自分から進んで立ち向かうしかないだろう。



組織・社会・未来についての所感

公害問題・食料危機問題・国民総背番号性・軍備・エネルギー危機・OPEC石油危機・人工ビー・遺伝子で自由に都合のよい人間をつくる・軍需産業・自然保護・Future Shock … 現在そして未来に多くの問題をかかえている社会はどうなっているのか、どうなっていくのか不安になる。こうした問題はすべて個人・国などが自分の利害の追求のために引き起こす社会問題である。個人とグループの関係が、そのまま個人と国家、国家と世界といった関係にあてはまっていくような気がする。何とかできることなのか。それともこのまま進んでいくより仕方がないのか。SFなどが近頃フィクションとは思えなくなってきた。あせるばかりで、実際の対策にはあまり目をむけていないような気がする。もっと対策にとり組む人々に注目すべきではなからうか。

学習方法についての所感

体験学習をこの人間関係科で幾度かうけて思うことは、「今、ここ」の重要性である。私は性格上、チャンスは逃したくないというところがあるのだが、反対に、やりたいことが済むまで次の作業・他の作業に移れないところがある。そのため、頭の中が何かでいっぱいの際は、授業にも身がはいらないし、体験もその意気込みが違っている。一般講義の授業ならば、後でノートをうつさせてもらったり、教科書を読んでいくだけでもとり戻せるが、「今、ここ」の体験学習になると、その時その場にはない限り有効な密度の濃い学習はできない。

台宿のねらいはここにあると思う。日常の個々の生活から切り離して設けられた学習の場では、家を忘れ、恋人を忘れ、日頃の悩みや心の中を占めている問題から離れることがまず体験学習に没入する体制を整えるからだ。

プロセスという言葉は、人間関係科用語だ。1年の時はこれにずいぶん悩まされたものだ。結果だけを追うようにして中・高・短大と進んできた私が、ものごとを見る他の見方を知ったのもこのプロセス重視の学習のおかげだといえる。

体験学習が私に与えようとして持っているものは沢山ある。それを私がどれだ

け吸収できるかは、その時の私自身である。そうした自覚が人間関係科の学習にいかにより必要であるかを、2年次の後期始めの「人間関係概論」の授業で理論化することにより、身にしみて理解できた。これまで人間関係科で学んできた資料を全部整理し、見出しをつけて取り出してはふりかえったりしてみたが、今まで何もわからず夢中にやってきたことが、1つのまとまりをもっていることに気づいたからだ。1年の時、私はまるでモルモットのような人間関係科の学習に対して抱いてきた学生のあり方を思った。はたして我々はモルモットだったが、それは教授のモルモットであったのではなく、自分に対してのモルモットだったのだ。そして、こうした設定された場での学習は、社会に出た時、内側からの私自身の成長として、生かされていくような気がする。

この人間関係科での1年半の間に、私はいろいろなことを考え学んできた。これはおそらくその密度の高さ、得たものの大きさは、この人間関係科でなければ得られなかったものだと思う。残る半年、卒業研究・台宿・各論ではE I A Hの体験学習を満足のいくまでやってみたいと思っている。

私の生き方

今まであまりにも、気づかずに過ごしてきた事が多すぎた。それは、対話する態度に欠けていたからだと思う。他人に期待して、裏切られるのが嫌だとか、ある程度のことは自分でできるのだから、一人でやっていくんだとイキがっていたのかもしれない。人に呼びかけ、人に聴くというのは、人に頼ることは違う。人間は、一人では生きて行けないものだし、沢山の人がいるから、そして沢山の人が関わり合って生きているからこそ人間というのに、その人間である喜びを分かち合う喜びを知らなかった。簡単に通りすぎてきた今までの人生が、あまりにもあっさりとし過ぎていて寂しいのは、人と関わる事が少なかったからだと思う。今、このことに気づいて、私は今後、出来るだけいろいろな事に気づく目を大事にしたいと思う。そのために、多くの人と深く関わりたい。充実した生を生きるためにも、多めに考えたいと思う。

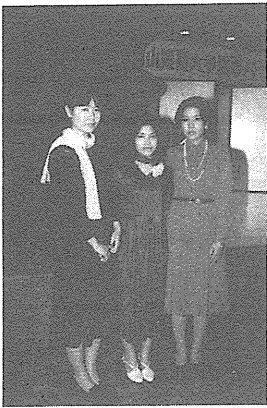
他人に関わることは、ある意味で怖い。自分がこれまで良しとしてきた事が、根底からくつがえされる可能性があるからだ。砂上の楼閣のように、高く積み上げてきたものががらがらと崩れ去り、再起の気力さえ失ってしまうほど自分がバラバラになってしまうかもしれない。だが、他人にけりをつけ、一人よがり生きるより、苦しくてもその中で精一杯生きたい気持ちの方が強い。苦しい中にも意味があるということ、人間関係の哲学的基礎論を通して少しだけ信じられるようになったからこそ、そう言えるのかもしれない。たとえ報いられない人生であれ、心の中に真実の光がともっていれば幸せだと感じられるような、そんな生き方ができたらいいと思う。



私の形成史 Part Ⅱ：南山短期大学を卒業してから

南山短期大学を卒業してから、もう五年余り、月日の流れを思えば、あっという間だった気もするし、長い人生の内のたった5～6年のことと思えば短いもの。けれど私個人の「あゆみ」としてこの年月をふりかえてみるならば、人として、女としての大きな節目をいくつも通り抜けた時期だし、就職、結婚という外的要因による環境の変化もいざ知らず、何より内面的な変化のはげしい時代だったと言える。

生まれてから、何度も引越しを繰り返し、転校をし、いつの間にか、周囲から期待されるままの姿を演じ、その期待を裏切ることなく、時にはそれ以上の自分を見出す為に努力し、その成果に自分で満足し、自信を持ってきた18年間。短大に入学するまでは、挫折感など味わったことがなかった。大学受験の失敗。この敗北感というか、目標を失った事への不安は大きかったけれど、何より私にショックを与えたのは、短大1年の夏にまとめた「私の形成史」だった。知人、恩師、友人に会い、「私」について語ってもらう機会は、後で考えてみると、それまでの自分の人生を裁かれる場となった気がするほど、衝撃的だった。『それまでの私には何も見えていなかった』『人と心を通じ合う、本当にわかり合うという体験が皆無のまま過ごしてきてしまった』そのことを率直に認めるのに、深い哀しみ、寂しさ、自己嫌悪、劣等感を伴い、18年という月日の重さに、過ぎてしまった時の流れに後悔もした。その後、自分がひどくいとおしく感じられ、その頃の私にとって言わば本当の友達と呼べる啓美やNONちゃんをはじめとする人間関係科の仲間がそばにいたことが、大きな支えであった。そして、人間関係科の授業や生活を通して、人と出遭うことの喜び、わかり合えた感激に、はじめて言葉を覚えた子供の様な、新鮮な驚きや発見に一喜一憂して、人間関係科という保育園の中で幸せにいらしていた。



そうした人間関係科での出来事も、楽しいことばかりだったとは言えない。自分を見つめ、又同時に身近にいる人に対して、一歩近づいて関心を持つこと、話しかけ、知ろうとする。そういう、普通なら少し抵抗のある試みを、授業の機会を通して、人間関係科の仲間とくり返す。Tグループでは、日常生活から完全に隔離するという設定で、激しい感情の表出をみたり、合宿形式の授業では反対に自炊まで分担して生活にどっぷりとつかった中で、仲間との関わりを体験する。その時々には、他の人と自分のものの感じ方の違いをはっきりと感じ、かなりのショックを受けたし、又、人が以外にも自分の事を見ていたり、自分の全く意識のない言動に対して、傷ついたり、特別の感情を抱いているという事を知った事もあった。その度に、深い劣等感や自己嫌悪に陥って、自分が他の人と違うという当たり前の事が、何か頼りなげで自信を失う事になったりした。けれど、そうした辛い思いも、人間関係科という場があったからこそ体験できた訳で、自分を見つめ、人に関心をもつ、時には話しかける、そうした積極的な人間関係をもととする姿勢が相対する双方にできれば、本当の自分を知ること、相手をわか

る事もないだろう。

人間関係科を卒業して、就職をして初めて、そういう設定をはずれて、捕え所のない社会という大海に、一人でこぎ出した私は、かすかな不安と、気負いを胸にしていた。

職場での私

自分の意志にかかわらず、気がついたら、学生生活を送っていた20才までと違い、自分の意志で就職活動をして、生き方を決めてゆく時に直面して、今思うと安易すぎた様に感じられてならない。就職課に張り出された求人広告を見て、職場からの卒業先輩の話しをきいて、心の内では、マスコミ関係の自分の個性を生かせる職場をと望んでいながら、安定した大企業で条件の良いところを選んでしまっている自分を「これが現実」と諦めさせていた。社会の機構、企業の内部などの知識は皆無のまま、希望に胸ふくらませ、一流企業に運良く合格。この時点では、自分の選択に間違いなかったと、待遇の良さ、給与支給される事に満足していた。配属先は希望通り行かず、経理部の営業管理をする、まあ言ってみれば地味な仕事で、対人よりはむしろ対数字、対帳簿の味気ないものだったが、何もかも初めての事ばかりで、苦手のそろばん片手の毎日があっという間に過ぎていった。

社内の人間関係は一見整然として、筋道に沿って進められており、仕事中の私語、私用は厳禁の雰囲気強く、私にとっては苦痛の連続だった。人間関係科時代は、思ったこと、気づいたことをすぐに言う事ができたし、それが相手に、周りに良い影響を与えていく事なら、授業の枠を越えて続けたり、熱中したりした。けれど会社は仕事をするところ、仕事の流れを良くする為にもコミュニケーションは必要だと思うのだけれども、新人の身分で、周りの人間関係を変えてゆく事は難しい課題だった。仕事上では、ベテランの先輩達の知識や経験にかなわないので、クラブ活動や、クラブ委員として、名古屋支社はじめての大規模なクリスマスパーティを企画したり、ソフトボール大会、ボーリング大会を開いたり、そういう面からのアプローチを試み、又課内旅行の幹事を引き受けるなどして、仕事以外のコミュニケーションの場を利用した。

入社して2年ぐらいの間がそうして過ぎて行った頃、人間関係科の先輩で同じクラブに入っていた方と話をする機会に恵まれた。人間関係科時代を経てくると、人と接する時、その人のいろいろな部分が見えてしまう。醜い部分、見たくないずるさ、脆さ、嫌な部分など。それが仕事をして行く上で、余分なエネルギーを使わせたりするし、相手は全く気づかずにいる為、こちら側が一方的に不快な思いをする事になる。もちろん、人間関係科出身であるのに係わらず、人はいろいろな事を感じることに変わりはないが、それを意識的に感じとれるかどうかは、人それぞれ違いがある。それに気づいた事を、相手に伝えるべきかどうか、相手との関係において考え込んでしまう。大体こういった共通した考えを持

っている事に、深く共鳴した。

人間関係科出身である気負いから、人と接しても、わかり合う事はできない。人とのきめ細かな触れ合いの中から、長い年月かけて築いた信頼感を得てはじめて、わかり合える土壌づくりができたといえる。そうでなければ、生意気なおせっかいな奴、と増々関係が悪くなるだけで、冷えきった関係になってしまう。

人間関係科で学び身につけた事を発揮できるのは、企業とか、大きな単位の全体に対してではなく、むしろ自分のまわりの、ほんの身近の限られた人々に対してだけなのではないかと思う。けれど、たとえ身近の人だけとは言っても、それは一時的な事ではなく、きっと一生を通じて信頼し合える深い絆としてお互いにとっていい関係が生まれてゆくものだ実感する。

歌うことが大好き 子供の頃から、歌うことが好きで、いつか大きなステージのスポットライトを浴びて…と願っていた私。けれどその夢に飛び込んでゆく勇氣が持てないまま、欲求不満をつのらせていた。何も出来ずうじうじと、きっかけを待っているだけで、結局何も始められずにいた自分に嫌気がさしていた頃、ある人と知り合った。私が、進学、就職と、まわりの期待と、自分の見栄的な部分も手伝って敷いてあるレールの上を、自分の夢や欲求を押さえながら生きていた事に比べ、その人は自分のやりたい事をいつも生活の軸に置いて生きてきた。中学校時代から将来はコンピューターに携わる技術者になりたいと目指し、高校時代までは卓球に打ち込み、ギターを弾く様になってからフォークグループを結成して、下宿生活の間は、仲間とアマチュアフォークの活動を中心に学生生活を送っていたという。私が会社の卓球クラブでこの人と知り合った時、たまたま歌うことが好きだという話から、その時その人が所属していた音楽サークルに誘われたのが切っ掛けで、生まれて初めて、本格的に歌うことを始める事にした。それまでの私にとって、歌うことは、自己満足でしかなかったけれど、サークルに入って、人と歌うこと、人の演奏で歌うことは、思ったより難しい。その上人前で歌うこと、きいてもらう事はもっともっと難しい。休みの日はほとんど一日中練習をして、声が潤れるほど歌った。人の心に入り込む様に歌詞の心がわかるまで。今まで、自分は少しは歌に自信があっただけに、録音した自分の歌を後でチェックしてみて、いかにひどいかわかるのは辛かった。けれどハーモニーが一つになった時、大勢であればあるほど幅があり美しく仕上る。むずかしいフレーズがうまく仕上がった時の喜びは、ひとしおで、コンサートがうまくいった時は、最高だった。

私に歌うきっかけを与えてくれたのが、今の私の主人であるが、「一緒に何かする」という姿勢は今も変わらない。共働きの私達が一緒に趣味の音楽活動を続けている。そして一緒にテニススクールにも通っている。お互いに良きライバルであり、良きアドバイザーでありたいと思っている。自分のやりたい事を我慢していた頃に比べて、張りが出て伸び伸びとしていた様に思う。自分にとって大切

なこと、一番やりたいことを、周りの都合のせいで諦めてしまわないで、思いきってやってみる勇気を持つことが、人生を切り開いていくことになるのだと、つくづく思う。

歌う喜びを知って、主人と知り合って、自分の生き方を決める時に当って、私は本当の自信を少しづつ身につけていった様な気がする。

結婚 世間一般でいう結婚適齢期は22～23才。私は24才をしっかりと過ぎていたので、遅い口だろうか。だが、我社に勤める女子社員は、平均25～26才の様で、私は同期入社仲間では2番目に結婚と、早い方だった。あたり前の事だが、生まれてはじめての経験で、まず決意するまでが大変だった。「もっと素晴らしい人が後に現われるのではないかしら」誰でもが思う事だと思う。私の場合は単純に、「この人しかいない」と思ったのだけれど、娘を嫁に出す父としては、将来性を考えて、経済的にも安定した人の方が…と欲を言えばかりがない。娘の目を信用できないもので反対もされた。恋をする年頃になってから、たとえば30才くらいまでに知り合った男性を、全部比べて、『3番目の人がいい』と思ったら、その人と結婚しよう、なんて事ができるなら、もっと簡単なだけでも、人生そうもうまくいかないところに、面白味があるのかも知れない。

結局は、私の人生、自分の選択を信じて、思う通りに生きるしかない。そう決断してからの私は、主人の支えもあって、人生マイペースを決め込んだ。自分の思う通りに生きてみよう。そう思うことで、少しずつ自信みたいなものが出てきた。自分の生き方に対する自信、結婚して、しばらく共働きをする事も、自然に決まった。ライフサイクルを二人で設計していく作業も今は楽しい。

共働きする事は、最初覚悟していたより、ずっと自然にすんなりとできる事だったし、むしろ結婚と同時に家に引き籠もるより、結婚前の同じ生活リズムを持っていた方が、落差が少なく自然だと思う。共同生活、合宿みたいな感じで、かえって二人の時間を大切にできるし、お互いを思いやる事もできて充実している。仕事を続けているせいか、私にとって結婚は、特別なことではなく、人生の中のひとつの節目にすぎない極自然な事だった様に思える。そして、この12月で退職する事も、おそらくその節目のひとつだと思う。

今、仕事を辞めるにあたって 近頃、テレビドラマや小説などでは、主婦が働きに出る事を扱ったものが多い。「くれない族の氾濫」という言葉があるほど、今まで家事や子育てに縛りつけられ、やりたい事を我慢し、人生を犠牲にしてきた女達が、社会と関わり仕事をしたいと外に出ようとする。又、夫の定年退職を期に離婚を切り出し、自分の為の人生をやり直そうと、趣味や永年の夢をかなえる為ひとりになろうとする。

一種の社会現象ともいえるこの様なことが何故起きるのか…。近頃、こうした事に興味もあり、女の人生について思いをはせる事が多いのだけれど、ひとつの



現実として、やはり、社会や、世間の慣習として、女は生まれてからずっと、シンデレラ・コンプレックスである事をあたり前とされてきた事がある。『素敵なお王子様が現われて、結婚すれば、人生は一生幸せの連続』。待ってさえすれば必ず幸せはやってくる。そうした受身の姿勢で生きる事。人生は幸せな結婚につきまると信じ込んで、その為に努める事。私達の世代でさえ現にそうした考え方が浸透しているのは確かだ。女の一生は結婚をする事、という考えが強ければ強いほど、自分自身の事を真剣に考える事が少なくなる。自分の本当にやりたい事、人生を賭けてやり通したい事、大切にしていきたい事。自分の愛するもの、見せかけでなく自分自身の為に自分を高める事、豊かになる事。そういった事を二次にしてまで幸せな結婚に執着する。そしてその結果、自分の人生が期待とは裏はらに過ぎ去る思いから、前述の様にあせり、いら立ち、何かしようとしたりするのではなかろうか。

私は今、仕事をやめて家に入ろうとしている。それはむしろ時代の流れに逆行している事さえある。けれど、私は、人生そうあせるまいと思う。今一番したいことを大切にしていきたいと思っている。今は早く子供が欲しい。そして子育ても自分でしてみたい。親が子を育てるのはあたり前だけれど、そのあたり前の事を自分の為にやってみたい。子を持つことで心が少しでもゆたかになれるなら、人生にゆとりが持てるなら、こんなに幸せな事はないだろう。

実際産み育てる側に立てば、こんなんびりしたものではないだろうが、女と生まれたからには、人と生まれたからには、片手間ではなく、正面からとり組んでみたい。

それと、私にとって、今仕事を辞める事は、これからの人生の充電期間でもある。モラトリアム期と呼べるかも知れない。ちょっと遅い気もするが、自分の人生について、ゆっくり考えてみたい。学生時代は、いつも自分の目の前に迫る目標にむかって頑張ってきた。ゆっくり立ち止まって考える間もなかった。短大時代は、その意味では、自分を見つめる良い機会だったけれど、私には二年は短かすぎた。そして幼きなすぎた。だから、ほんの切っ掛けくらいにしかならなかった。というより、出て行く社会についてあまりに無知であった。自分のやりたい事が何で、どうすればそれができるか、どこに行けば良いのか。それを知り、実行する事ができなかった。大切な時代を、少し無駄に、贅沢に過ごしてしまっただけにも思える。それに気づいたのは、今の仕事に就いて二年もした頃だろうか。

その頃、今の夫と知り合い、今に至っている事は前にも述べたが、過ぎてしまった時間を悔いてみるにはじまらない。ただ、自分のやりたい事を、まじめに考えてみたいと思う。その為には、本を沢山読みたい。ジャンルは問わず、いろいろなものを吸収したいと思っている。そして、暇を見ては、思った事を書き留めていきたいと思っている。文章を書く事は、子供の頃から好きだったし、漠然と抱えている事を、文字にしてみると、改めて自分の意識がはっきりするものだから

ら…。

仕事を辞める事に未練はない。職場で世代を越えて知り合えた先輩たちと話す機会が少なくなる事は淋しいけれど、今は、我社の社員である肩書きから離れて、一人の私に戻る事に新鮮なよろこびを感じている。会社に支えられていた、社会的な保障がなくなる事に対する不安はないと言えば嘘になるが、生き甲斐を感じられない仕事にしがみついて、貴重な人生を無駄にしていく事を思えば、新たな人生の展開に期待している気持の方が強い。

もちろん、こんな強気な事が言えるのも、私には今、信頼できる夫があるからで、本当は弱くて勇気のない自分を優しく見守り支えてくれるからこそ、できる事だと思う。

何かのドラマの様な、厳しいものではないけれど、昨年ヒットした映画、フラッシュダンスの様に、愛する人に支えられて、自分のやりとげたい夢にむかって努力する、そんな風であれたら…と勝手な事を思っている。

今、そしてこれから 女にとって、20才から30才までの10年間は、めまぐるしい変化のある時期だと思う。もちろん、個人的に違いもあろうが、私にとって南山短期大学卒業から現在までを振り返ると、かなりの変化、成長と呼べるものがあつた様に思う。

自分の未来に対する不安、この大半は、やはり「結婚」という未知のものが占めていたけれど、結婚して二年になる現在、「結婚」は未知なものではなくなり、毎日毎日の生活の積み重ねであると実感できる様になった。夢々した想像の世界が、今は地に足をつけてその中でくらしている訳で、それなりのリズムをもってマイペースで送っている。こうした中では、物事も割合落ちついた目で観察できるし、何より親許を離れ、曲りなりにも自立しているという自信が、そうさせてくれているのだとも思う。今までより、より多くのものが見えてくると、その分人生が豊かになる様な気がする。悩みも当然増すだろうが、少しは深みのある人間になる気がする。

とは言うものの、これからまだまだ、自分を見失うほどの苦しみに出会うかもしれない。子育てもむずかしいだろう。校内暴力や非行など私達の学生時代とは比べものにならないくらいだし、社会制度の変化も著しく、老人問題も深刻化している。この先の不安を思えばきりがないけれど、いつの時も、人間関係科で身につけた自分を見つめる姿勢、ふりかえりの習慣は大切に実行していきたいと思っている。

退職して、家庭に入る頃から、私の本当の意味でのモラトリアムが始まる。この先の5年、10年先の私が、今より更に成長しているか否か、その時、私にとっての人間関係科は、どう位置づけられているか。また書いてみたいと思う。「人間関係科時代の2年間にやったことが、今どんな風に生かされているか。」という問に対し「〇〇です」とはっきり断言できる事柄は、思い浮かばないので

けれど、全く今の自分に影響がなかったかと言えば、そんな事はない。確かに、人間関係科での経験が何かしら、自分の人生に、物の見方に、何か起こった時自分のとる態度に、影響を与えている様に思う。

たとえば、南山短期大学に入る前と短大時代の私は、自分の事に、自分に関わる事柄には考え、悩みもしたけれど、それが他人の事となると、『人は人』と割合冷たく、ドライに割り切って、親身になる事が少なかった。相談をもちかけられて、話をきいてあげる事はよくあったが、感想を述べる程度でそれ以上は踏み込まない。あーしろこーしろと踏み込んで相手の立場に自分を置いて考える事などできなかったのである。「結局は自分で気づいて解決するしかないんだから」というのが、私のその頃の決まり文句だった。そのことには今もかわりはないけれど、つまり、「結局は自分で…」という事に変わりはないが、その前に、「何故この人は、私に相談をしてくれたんだろう」と思い、「どんな思いで話してくれているのだろう」と、私なりに、そこにいる相手を察してあげようと努める様になった。少しでも相手の気持ちに近づく事で、お互いの交わす言葉のひとつひとつに、気持ちが重なり、通じているんだなあと思える。そんな触れ合いを感じられるようになったのは、歳をとったせいもあるだろうが、もしかすると、人関時代に得たもののひとつかも知れないと思う。またこちらの気持ちが相手に伝わらないもどかしさも、人間関係科を経てはじめて味わった気がする。恐らく人関の頃は、何度もグループの皆にそういう気持を味わせていたんだろう。

それでもまだ、人とのつきあいはむずかしい。「これを相手に伝えたものかどうか」、相手との距離をはかって迷うこともある。結果を慮って、考えばかり先走る。他人の事を見過ごしにできないなんて事もある。その時々、考え決めてゆくことだが、今から何年かしたらまた、変わっているかも知れない。

人間関係科時代は、私の中に、石を投げかけてくれた。その波紋は、だんだんとひろがっているけれども、どこまでの輪になるのかは予想できない。あの2年間に、良い経験ができたと思っている。そして、今あの経験をしたら、また違うだろうか、とも思う。

けれど、今は、自分の人生を、マイペースで、試行錯誤でやってゆきたいと思っている。

人はその織り成す人生の節目に立つ時、それまで歩んで来た過程を振り返り、より良き人間の成長…いかに生きるべきかを問い、EIAHE' の舵を取り直し、新たな一步を踏出そうとするものである。わずか2年間の課程の中で、この自己の内的体験を試行錯誤的に自覚しながら段階的に進めるライフスタイルへの基礎的体験学習…人間教育の学び方を学び、人生の生き方を生き始めた一学生の7年間の歩みは、読む者にこの人間教育に於ける体験学習の少なからざる教育効果の軌跡を読み取らせるものではなからうか。